



民医連のめざす看護とその基本となるもの

筋萎縮性側索硬化症を抱えた A氏を通して見出した あきらめない関わりの軌跡



2023年ブックレットBチーム

甲府共立病院



この事例を選択した理由

ALSに罹患し入退院を繰り返しているA氏の事例から、民医連がどのような医療・介護を提供し、社会に貢献しているかを学べるのではないかと、メンバーの中にはA氏と関わった者もあり事例を共有しやすいと考えた。また、入院の度にスタッフが疲弊している状況があり、経過やケアを振り返る必要性を感じ、本症例を選択した。

事例紹介 A氏 50歳代 女性

病名:筋萎縮性側索硬化症 (Amyotrophic Lateral Sclerosis以下ALS)

既往歴:頸椎脊柱管狭窄症術後、高血圧症

家族状況:義父母、夫、長女夫婦、孫2人、次女と同居

生活歴:県内生まれ、職業は美容師

病前の生活歴についてはカルテや看護サマリにも記載なく、詳細は不明。

介護保険:要介護5

利用しているサービス:訪問診療、訪問看護、訪問リハビリ、

訪問介護、重度訪問介護

Step 1

事例のまとめ

20XX年壮年期に多相性ニューロパチーの診断で他院より転院、ALSと確定診断されNPPVが導入された。当初からA氏と家族は在宅生活を希望。

訪問看護と訪問リハビリを利用し診療所へ通院していたが、機能低下の進行が早くADLは全介助となり訪問診療へ移行。

入院中、呼吸困難から人工呼吸器管理となり、気管切開、胃瘻造設し退院するが、以降も、窒息や肺炎、レスパイトでの入退院を繰り返した。

A氏は身体の位置などの要求も細かくケアに時間を要するため、ケアの負担が大きく看護師が疲弊するなど在宅でも事業所の変更や調整に困難を要したが、地域や多職種間の連携によって、在宅生活が継続し2年が経過した。

Step2

基本となるもので事例を評価・検討

患者の見方・捉え方 (認識の評価)	評価内容・今後の課題
患者観： いのちの平等と個人の 尊厳	A氏と家族の気持ちを尊重した関わりができていた。救急搬送だけでなくレスパイト入院など、必要な医療を受ける権利が保障されており、A氏の思いをくみ取って多職種へ共有することで、適切な情報共有と意思決定支援につながった。結果として、疾患にとらわれず必要な医療を受けられる体制が整っていた。
人間観： 変革し発達する存在	当初、A氏は気管切開に否定的で涙を見せる場面もあったが、家族や医療者との関わりを通して不安を表出し、必要な情報を求めるなど主体的な行動が見られた。家族や看護師、セラピストからの働きかけと、A氏自身の働きかけが相互に影響し合い、意思決定を支える関係が形成されていた。
疾病観： 生活と労働の視点	患者と病気の関係を理解するには、これまでの人生や生活史を知ることが重要であり、そこから楽しみや希望を把握することで思いに寄り添ったケアが可能となる。A氏の療養や生活環境は、家族や支援体制の関わりによって大きく変化することを理解した。在宅生活を続けるためには、患者だけでなく家族の状況も考慮し、共に支える体制をつくることが課題であり、発症後もあきらめず支える存在の重要性を実感した。
医療観： 患者・住民、医療従事者 との協働の営み	A氏のこだわりや訴えへの対応に時間を要し、限られた時間の中で十分な対話ができず、コミュニケーション手段の制限も相まって看護師側に焦りが生じていた。ゆとりあるケアのためには、看護師体制の強化が必要であると感じた。 複数回のカンファレンスや病状説明を通じて患者・家族・医療者の意思統一を図り、専門機関への橋渡しやサービス調整を行うことで、今後の在宅生活を支える基盤を整えることができた。

Step2

基本となるもので事例を評価・検討

看護の視点

評価内容・今後の課題

患者の立場に立つ

A氏と家族の思いを尊重した関わりができていた。本音はわからないこともあるかもしれない。病前の生活史はカルテからは読み取れなかった。生活史を聴けていないことは理由があるのだと思う。ケアに時間を取られ、話を聞く時間を取れなかっただろうと推測した。このブックレットの取り組むことが患者の立場に立つことを考える機会となっている。患者のケアや在宅指導などで疲弊し、なかなか患者の本当の思いや考えには耳を傾ける時間が持てなかったのではないか。声は失ったが、オリヒメ(コミュニケーションツール)もあるのでA氏の意向を聞ける機会を設けられると良い。

患者の要求から出発する

ヘルパーも頑張っている様子が見えた。病棟看護師がヘルパーの気持ちを聞き出し受け止めている。A氏と向き合うことも必要だし、近い人のアプローチして聞くことも重要だった。もしも自分がA氏と同じような病状になったら2年の経過を受け入れられるだろうか、看護師に強くあたる気持ちもわかる、A氏の性格や気持ちの浮き沈みもあった。看護師もA氏の要求に答えたいが答えられない現状があり苦しかったと思う。患者の思いを傾聴することで次の段階に必要なケアへとつなげられている。

患者とともにたたかう

A氏の困りごとを看護師は課題としてとらえ行動していた。要求が多いA氏に答え切れない状況は、無力感や怒りなどもあったかもしれない。体力的にも精神的にも疲弊する中で、A氏の希望を叶えるために、看護師もヘルパーも家族もケアマネもたたかっていた。A氏もたたかっていた。A氏の思いは新しいヘルパーへの不安や心配を話していた。看護師がもっと多くいたら、定期的にA氏と話を聞くだけの時間が持てるのではないか。みんなできる限りの範囲でたたかっていた。家族は一貫して自宅で過ごして欲しい、A氏の希望に沿いたいと意志表示していた。家族もたたかっていた。看護師を増やす運動が必要だ。患者の要求実現のため、長時間のケア介入を要していることが今後の課題。患者の思いに常に寄り添い、患者・家族と医療者が課題を共有する事で必要な情報提供や指導を行い、在宅生活を支援していた。

Step2

基本となるもので事例を評価・検討

看護の優点	評価内容・今後の課題
統合性・継続性	多職種連携については、病院内外、電話相談をはじめ、カンファレンスをたくさん開催していた。たくさんの組織の関わりでA氏が安全安楽に在宅生活を送れている。退院後も在宅生活でのケアが継続していくという看護の視点が重要だった。一人の患者・家族を支えるために、多くの専門職が共同し、在宅での療養を支援するべく、活動することが出来ている。
無差別性	年齢や障害や経済的理由で差別していない。可能な限り受け入れている。疾患によって差別されないよう、常に医療・介護が支援出来る体制を構築している。
民主性	初回入院時の指導後、家族の理解不足があったことが再入院時に判明した。病棟看護師はケアも指導も頑張っていたが、家族もいろいろな事項を聴いたためか、指導内容がうまく伝わっていなかった。再入院は別階であったが、再指導しサポートができた。セラピストの専門的な働きかけは素晴らしかった。病棟看護師がヘルパーと協働し、情報共有やサポートをしていた。頻回にカンファレンスを開催し在宅生活の問題点を明確にすることができていた。それぞれの専門職が専門性を発揮しつつ、在宅部門とも共同する事で、継続的な支援を行うことが出来ていた。
人権を守る運動	気管切開をするかどうかの意志決定支援として、気管切開のメリット、デメリットの説明や思いの傾聴をしA氏の思いを知り介入できていた。ALS協会の紹介や連携を行っていた。患者・家族の意思決定の支援を全体で支援していた。疾患によって差別されないよう、あらゆる支援を行うことが出来ていた。

Step3

患者の見方・とらえ方 人間観

- カルテやサマリから生活歴が十分に読み取れず、当初はケアに時間を要して患者の思いに耳を傾ける余裕がなかったことが推察された。患者の人生や病前の生活背景を知ることの重要性を改めて認識した。
- ALSにより自分でできることが減っても、患者の思いをくみ取る努力を続け、多職種で多様な視点から検討することで新たな提案が生まれ、あきらめないケアが安定につながった。入院中も在宅でも、患者・家族の思いに寄り添った意思決定支援を行うことで、患者が望む生活を実現できていた。

患者を一人の人間として個人の尊厳をまもり、生きる権利を保障した取り組みから、「人間は社会のありようや周囲の人たちの働きかけの影響を受けて変わることができる」ととらえることができた

Step3

患者の見方・とらえ方 民主性

- それぞれの専門職が専門性を発揮しつつ、在宅部門とも共同する事で、継続的な支援が出来ていた。
- 頻回にカンファレンスをし、問題点を明確にしていた
- ALS協会による視線入力装置の説明やALS患者の介入経験が豊富な事業所に相談した
- 在宅生活が円滑に出来る為には、継続的且つ統一した医療行為を提供することが重要であり、地域との密な関わりが必要である

これは民医連だからこそ出来ることで強みである
地域の事業所とも連携していた

Step3

患者の見方・とらえ方

医療観

- 患者のニーズに沿うことでケアに時間を要してしまうため、医療者の負担が大きく、今回の事例では患者と医療者が平等という点については難しいと感じた
- ALSという疾患については医療者側の知識不足も否めず、疾患が患者に及ぼす影響を理解していく必要があると感じた
- 患者のニーズを知り多職種間で情報を共有することで患者に寄り添い、適切な段階で患者に合わせた医療、療養環境を提供出来ている

患者が主人公で中心的な存在であると
再認識することが出来た

Step4

社会の見方・とらえ方

いのち

- 在宅生活を支える中で患者のニーズに応じた支援を継続していたが、ケアに時間を要し、限られた体制では医療者の負担が大きい状況があった。患者の希望を最優先に看護を提供する一方で、スタッフには葛藤や疲弊も生じていたと推察される。ALS患者への対応経験が少ない中でも、患者に向き合っていたからこそその思いであった。
- どのような場面でも患者を受け入れる体制を整えたことはA氏の命を守ることに繋がった。医療機関や地域との連携を密にし、在宅生活を支える仕組みを整える必要性を感じた。互いを尊重し、尊厳を守りながら共に問題解決に取り組むことの重要性を再認識した。

Step4

社会の見方・とらえ方 憲法

13条「個人の尊重・幸福追求権・公共の福祉」

- 個人として尊重され、その人らしく生きるうえでも多くの多様な医療・介護従事者が関わっている
- ケアに時間がかかっても患者のニーズに沿うケアを提供している
- ALSの有無にとらわれず、適切な医療・介護の支援を受けている
- 在宅生活を継続出来るよう様々な支援が提供されている

25条「生存権」

- 病状が進行していく中でも、その都度、患者の訴えや家族の希望を聞き、何が最善かを考え、様々な制度を利用することで住み慣れた自宅での生活を継続出来ている

Step4

社会の見方・とらえ方

綱領

『人権を尊重し、共同のいとなみとしての医療と介護・福祉をすすめ、人びとのいのちと健康を守ります』

『地域・職域の人びとと共に、医療機関、福祉施設などとの連携を強め、安心して住み続けられるまちづくりをすすめます』

様々な医療・介護・福祉が連携し、患者・家族を多方面から支援している事を実感出来る事例であった。

Step5

民医連看護の 継承・発展

- ALSを抱える患者が今後の人生を歩むためには、一つの医療機関だけでなく、多様な機関が連携し、患者のニーズを尊重した在宅生活支援を継続していく必要がある。
- 疾患や経済状況に関わらず、他職種・行政と協力し、その人らしい生活を支えることは、民医連のめざす看護・介護の実践そのものである。
- 日々の業務にとどまらず、地域や社会に目を向け、「なんのために、誰のために」を問い続ける姿勢が求められる。
- ALSをはじめとする難病患者の生活支援制度や社会保障の拡充、健康に生きる権利の実現をめざし、医療・介護を通じてすべての患者が安心して療養できる社会をつくるために、事例からの学びを生かし、民医連のめざす看護を発信していく。

おわりに

A氏の事例を分析する中で、当初は見えなかった課題や背景が浮かび上がった。急速に進行する病状の中で、看護師はA氏と家族に最良のケアを提供しようと努めていたが、生活史を十分に聞く時間が確保できなかったと推察される。A氏の意向を尊重し、寄り添っていたからこそ生じた困難であり、患者の生活背景や人生を知ることの重要性を改めて認識した。

ALSの病態を学ぶ中で、A氏の急激な変化は発症から約2年の筋力低下期と一致しており、疾患が生活や意思決定に及ぼす影響を理解する必要性を学んだ。

民医連のめざす看護として、患者の願いを尊重し、多職種と連携しながら在宅生活を支える姿勢の重要性を学んだ。在宅生活を継続するためには、入院中の医療者だけでなく行政、地域資源との連携が不可欠であり、病気になってもできることを共に探し、患者を支え続ける姿勢が重要であると再確認した。



日常の看護実践に自信と誇りをもって、
後輩たちに伝えていきましょう。

生きる&活きるを支える
いのちに寄り添う看護の実践者を育てていこう!!

ブックレット事例検討会で皆が作った新たなフレーズが!!

民 みんなで

医 医療(いのち)をつなげるために

連 連携を!!!!